

紅型は沖縄で制作される染織品で綿や麻などの布帛に、型紙を使用して模様染したもので主に着物として商品化されている。模様は燕子花や桜などの植物、流水、雲などの自然物が好まれ、和のイメージを与える作品が多い。また、現在では、沖縄の古典芸能の衣裳としても欠かせないもので、大模様型の色鮮やかな紅型衣裳が着用され、沖縄を象徴する工芸品となっている。

このような「紅型」だが、どのような背景を持って生み出されたのか、王国時代にはどのような階級の人々に、どのような場面で着用されていたのかを示す記録は非常に少なく、具体的な紅型像というものを描くことは難しい。しかし、今日「紅型」について書かれた研究書や一般書物によれば、王妃が礼装として着用していた、黄色地は王家にだけ許されていた、あるいは芸能衣裳として用いられていた、といった歴史的な事柄が記されている。文献が乏しいにも関わらず、このような言説はどのようにして構築されるに至ったのであろうか。

本論では、先学の「紅型研究」を検証し、従来断片的にしか行なわれてこなかった絵画・文献資料・現存作品等の網羅的な研究を行い、今日の「紅型」のイメージに至る過程浮き彫りにするとともに、王国時代の「紅型」の実像に迫ることを目的としている。

王国時代から近年までに「紅型」について書かれた文献や記述を精査し、疑問点を再確認する作業を行った。その結果、王国時代には「形付け」と称されていた染物が本土の研究者であり型絵染め作家でもある鎌倉芳太郎により「紅型」と名付けられた事が確認できた。また「紅型」に関わる以下の疑問点を抽出した。

- ・江戸上りでの琉球使節の装束や御冠船芸能の衣裳に「形付け」が着用されていたとする説の真偽
- ・「形付け」が王妃の礼装であったとする説の真偽

江戸上りや御冠船芸能で着用されていた衣裳を検証するため、1832年(天保3)の江戸上りと1838年(戌年)の御冠船芸能での衣裳を調べた。その結果、装束や衣裳の地質には身分に応じたヒエラルキーがあり、緞子や綸子などの絹織物の地質の違いにより身分を示していたことが確認できた。同時に、江戸上りでは使節が「形付け」を着用して人々の面前に登場することはなく、御冠船芸能においても今日のような華やかな「紅型」衣裳の着用は、認めることはできなかった。また、各資料の分析から「形付け」は王妃の礼装ではなかったこと、庶民階級にも特定の「形付け」が着用されていたことを明らかにした。

では、なぜ現在の通説と王国時代の実像とのギャップが生じたのであろうか。考察の結果、江戸上りや御冠船で演じられた宮廷芸能が、琉球王国滅亡(1879年)とともに変容し、庶民階級の芸能となったこととの関連性を指摘した。芸能を享受する階層が琉球の士族階級や大和の武家階級、中国冊封使から庶民へと変化するにつれて、衣裳も庶民層に受け入れられやすい華やかな「紅型」が取り入れられた。また、王国の滅亡に伴い衣服制度が崩壊し、誰もが自由な服装を享受できる余地が生じたことも一因であると考察した。さらに、大正時代末期より、本土の「紅型」研究者であり収集家でもある鎌倉芳太郎らによって「紅型」の収集と美術品としての鑑賞が推進されたことが、芸能衣裳としての「紅型」の役割に拍車をかけたことを指摘した。

大正14年に「紅型」と名付けられた「形付け」は、この時より正当な王国時代の文脈から離れ、歴史的文化的混乱の中で「芸能衣裳であった」あるいは「王妃の礼装であった」という学説が生じた。戦後の「紅型研究」では、これらの研究が無批判に受け入れられ、追従されてきたことを明らかにした。その要因は沖縄の芸術調査を精力的に行い、沖縄芸術の地位を高めた鎌倉芳太郎の影響力の強さや、戦争により多くの文化財や歴史的資料を失ったことなどが挙げられる。また、一方で大正時代末期には衰退の一途をたどっていた「紅型」産業が、本土のこのような評価により戦後復興を果たしたことも事実である。

本論では今日の「紅型研究」がこのように構築されてきたことを明らかにし、王国時代の「紅型像」というものを浮き彫りにしたことで、「紅型研究」に新たな視点を加えるものとなった。

